



梅花園先生撰

題類

士朗叟發白集

製本所

A765
1
1-1X

静觀堂

愛知県文化センター
昭 57.5.17 和
291983

愛知県有物品

北山の愚心公、切に列
子の寓言を、
中々、
今梅花園主
朱村史生、
乃と世

所のよきと學ぶ人の
即ち毎人一人と夜ふ日ふ
もと免て情にあやの思
月々の隔るるに如く
入江しも限あられど

夜竹の汲も流し
種くしなのおまふへ
とくそとふに様
のあまんとの進む造化
の神のまもかきり

實撰者と云ふ

と云つ

乙
四
繩

五
道

松和園白集母を廣きりて
のち不援編の何れ閑し
事なきを深し深き事
使は徳口平く高くして
風調紙暮ふ人をく
實の甚蕉翁より一大家
初心を鑑もを深る

清巻と句集を精探の意候
あやまらば句數多ふ所調發
學ふに其題を滑るゝふふ
されく多しと云し士朗叟
一世の句をあつて四時と雜を
わらふの初學に及ぶに及
かふ衆たの類題して書名も

あやまらば句集を精探の意候
あやまらば句數多ふ所調發
學ふに其題を滑るゝふふ
されく多しと云し士朗叟
一世の句をあつて四時と雜を
わらふの初學に及ぶに及
かふ衆たの類題して書名も

二十二萬言也 初平深う
机より筆を引く 松竹を
清く 師徳を信じて
文政乙酉秋

梅花園梅間記

凡例

云景書れ共きハモウキク士朗史文集に
載け

神將名所と云一先部と云千向と云
繪と云ク少人たり 藝田如踏歌と云梅は
向ふわくをさす一云々也

史に吟詠千と云て善く一ハれと云く
乃ともあらん杜撰と云く原序と云く
わくあつち小書と云く切れと云くはあ刺

此編よりとす伏聞揚ハ度毎子書とて
後乃編つてかゝるといふ
他邦よをおせられたる白木上謀す水と
あつたは裁まき水とていふ一書は
毎くすきまけをいふ
流り変化と此道の考より八年序成
要し應うとしかの年月とていふぬも
あとはまゝくせずとて人書し終へ

類歌士朗叟教句集卷上

春之部

葉旦

何事も分つてまゝのあゝとてな

年賀

とつむやあゝとて年の次とてま

正月

灯は見えぬとて正月は宵寐が

元の雪れつとていふ

元日

入りの年乃却てていふ雪れま

菖菴

焼つくーくそをまか乃其

月雲やなりぬそ花れ其

元日子日

松はさしあつやけ色と花の其

よれそふの其あ花乃春

二日

月雲はあめ年の二日か

其も二日さるる松

松はけやきの六初りあ八月

筑前山森のさと秋枝氏需

直して菖菴子とくをり

菖菴子初の糸も香子白ひり梅の白

松の内菖菴戸や立初見えは雲れ内

菖菴わつか梅は梅唱ととろくう年

あつむ菖菴を人れりいふ

菖菴子れり菖菴れ畑造

策雲居解歩

そはともあつて菖菴を摘まる

菖菴乃初もろくぬりうな

菱草

我ま白々しき花をくさし
りくさしや又も色くさる菴の鍵

古井をみ房より

梅

芳若のや横に柳しつ松のけ
くさしきも咲らん月と梅
梅く香や唯あつましれ香か
梅の月とくさし居るは雪月松
梅はまき門や其角れくし

契田社踏歌

花は梅は柳は
梅は花ぬきもさるや小盆

子代倉まで花の姿をね

梅はくも香りくも 泪く郎

曉亭集初七

う花柳りくもさるき夕くお
世よりきき白ひのこもや月と梅
俳諧のくさし本よりくさるめを
を咲て梅をくさるぬ日ハなうり

望しゆくや年子すきあるくはのそ
梢もふ咲く梅乃花ひとの
芭蕉翁肖像眼

胎も鼻もひくそく梅の花
菅公十年忌龜尾天満宮

影家法楽

玉漏る言やあそく望し梅の花
梅花意梅久歌

春宵一刻值千金

二七

夕色初ら門つくと春よ月と梅
山高く水長し梅とらく

浮山な月らくあそく梅乃花
紅の上や二人くしと折梅の玉

五十々山の麓六十八山れ半腹
老の山崎大飯くあそくとまろく

とあつていとあそく梅也

山よ古き事あり梅の下傳ひ
梅お園の梅見ハ二月二となり

二七

あやうし 自ら来て予を為す
投しりれい

子新来く是せざるを梅は心多し
月宮ハ梅子二月乃あらし
梅、多やつこ大州の柔れ本畑
ゆくくと棹をゆく梅花園の
梅は関と漕ぎゆれハ放るる小艇
こゆききふのこくく軽なりぬあ
おりにらの舟也海は紅白は梅や

あやうし 海のうらなや

むし海はゆめく小舟とつる梅の花
子のやうと梅子れい梅乃花
九岳亭

梅の香や露の中まて挿らきり

方々葉落ふ喜ぶ心は院芭

湖上は甚し

様、多やあまの薪を志賀の山

梅花園

柳

ワ、若くは古の生家系柳見か
御嶽のまゝまゝの柳うな
猪川の猪うまのふ柳うな
青柳まゝまゝの垢かかゝり
青柳やまゝまゝの垢かかゝり
伊勢まゝ

青柳乃而や少家のひらり口
柳もやまゝ一袋まゝ一毎
花柳まゝまゝ柳まゝまゝ

矢矧

青柳の東海邊ハ五里ノ柳
柳まゝまゝまゝまゝ

青柳岩

青柳の岩根くまゝまゝ
一おう川坂まゝの柳まゝ那
岩まゝまゝまゝまゝ
ゆまゝまゝまゝまゝ
岩まゝまゝまゝまゝ

鶯

ほろろと啼き管草一草の如
里婦を〜管をき木のるが
題管水筒

管よる〜い啼くハ水一斗
叶君を最管れ名な〜し
〜い其の宿ハちのきき月夜
管乃 柳ノ啼ハや三ツれ月
管々わ〜も鳴る〜月と柳
水の小庭を管のま〜りと

庭掃男乃管よりりハ

鶯と〜もな柳ノ根〜して
管子 清流乃水ありなり
と〜や〜も管啼ぬ壺の月
々や啼〜ん管見〜る根れ内
箱根山

管れ藤あり〜〜二の音が
啼〜〜も管外〜も〜りり
管〜〜も管世と竹の中〜

管のうらやまよりの二夜三夜

我店ハむしー管西月夜

くめ柳け一里と接し卯

喜風や猶子あてくる杉の立

平月ナニイ伊勢道子入ニ事

柳子おれ神ふとるる

喜風やむしー踊乃柳子成

ゆもむんあまも世もむん喜の風

雁鴨のつくや解をれ細きの

竹重

白奥

美松

鹿

白奥のありとははんてく松のけ

くつくーきぬ子小松のむしー

舟人れいらまーより軽うむし

朝露貝の卯凍まこりあふふ

とーうれおくりくとりあうお

古き乃きりんむらぬあさ鹿

ハきうむし鹿の板橋流しーり

蕨古や海士れあけろ涅槃像

是やうらやまよりの死ねハ佛か

涅槃

此の
九

盗人のく〜く〜りぬ淫樂像
新買ひり人とは淫樂を
聆ま〜十のあり〜り松の月
宗濂ふき〜り夜あり松の月
お母らより〜り月乃志
春の月 雑子の志 喜ふ〜りぬ
春乃月 雑子の里と志
少年行
喜の月 駒〜り〜らと並〜り

聆月

春月

春の月 松よ〜り〜り松の月
雑子 松よ〜り〜り松の月

病後

雑子

春の月 松よ〜り〜り松の月
帰〜り〜り〜り松の月
わ〜り〜り〜り松の月
松の月 松よ〜り〜り松の月

幻信草

松本のき〜り〜り松の月

此の
九

るは明く雛子のうさぬ細か
深草や雛子れりけし人の家

大森山中

うらあゝまゝゝ雪れきゝまゝくぬ
雛子顔白くあつゝや啼鳥
櫻雪や塘のうきはきく花
錫杖の少きおき新れ乙女哉
乙女乃蝶もなぬ山とて那
塩木つむ中と並れ澄まら

燕

帰雁

雨をぬくつまゝゝ並ぬ根が
帰るぬく居なく芦乃二葉か

西湖

今一度望田を立ち上帰る居
雲霞又海雁となりまゝり

春雁

梅柳アも心やのこまゝ人
のとのらハ夜を啼うりまゝの丁
蝶をやゝゝが果る春の居

雲雀

くゝ毎に同々くまゝを揚雲雀

土曜
六

雀

父母れありとを竹の啼雀

啼きくもむねを啼り蝶をま

小所讀

蝶鳥

蛙

つゝもれ種美人の村あかり

浮しつむねれきと啼く

蛙やけはひくくもむね乃啼

夕々水や又なきで子なき蛙

ふえく赤く水け蛙が

茅場地

陽空

つくくくもむねがうり夕々

笠寺や蛙鳴ねれ色却り路

人もぬく蛙もあつて山家

桐栞やまよく州まよく蛙

葉火すけはひまよくと暮蛙

空破地やうりく世てり半日

陽空のまよ白くそ紙乃鼻

けうあやつふもそるしつて

陽空と淋しき物あつて

猫恋 山をり一帯はるく猫の恋
紅梅 新物よあねり猫のり葉が
寄居虫 ひれおて月もくなれや
田螺 言ふ言ふきけ八洲一き田螺が

所思

思ふをいづと誰か田一此傍住居
花もちり月も入るり田や一売
ととく千世話くぬ花を友
三月廿六日 古和歌よとまらて

初桜 五月角中ありはくぬん初らる
菊お根 葉のあそりや二まおれりさう
春草 朝之里もくろ誰をそまの葉
苗代 胸くろく活きの葉もくまの葉
稲ま〜〜里〜〜月〜〜

はな〜〜を〜〜ハおの運き
年々ああありはくぬ花を友
出〜〜く〜〜もあそりな
関〜〜い

菜花

菜乃花也志賀山越成より
菜れむ千大名のゆき菜の柳
柳の肥く菜の葉すのぬきめし

桂五亭

菜乃花を深めよ花れ柳衣

かくつひれも親もくわきま

けしきも見くま子花はま

よひ

ひのむよ口菊そめく亭菜

種蒔

柳を伊勢からかき宵月松
夕の月を流し種をまきよこ

家は賀切るとくま吉人吉

善とく小顔のふかきとくわ

春

よきと事とせよとくりあり家は夫

路果園中の若葉一柳移し

栽しとくあやぐくゆれ

よるくれ舞舞つらんよき乃色

春

喜れぬもくくたはひよきよる

春水
喜海
喜れら乃出入ね乃一本う角
喜乃水長良へ落て形形し
住し一の喜れひぬう春の海

凡化亭詩集

春夜
喜の夜ねおとく物かうらる

醉後

喜れ夜やおとくのけし村枕
春の夜れおりの夜色ハ黒茶挽
も酒乃おの喜しあうく都

二月
喜のねら心れあきうらるをり紫
大まきよ喜れい西かき二月哉

更衣
きまききや入られ座る喜
いけいけいけいけい

風巾
几巾きねく舞のりをれ新裁

水
屋根かさよ離れ鳴は水し

鳴き鳥
紫れ戸や寝てとものこと鳴き鳥

雲入鳥
鳥雲よ入然若乃つみ

雛
雛に駕をたれうら見く幼ぬ

桃

まりこれお

うの子きく桃さしつり雛のお
山のもよ花れ朝ありひなのあ
まゝあまもまりや難乃賜まりり
おあるまや桃さし門の砂さし
壽老人撰

汐干

何のその干とせは桃の一作さき
依りんこや日らねてまらう桃のふ
人さ活汐干ねらう汐干だ

花

久能山の薫

汐干ともあつて西り浪間を
山寺や花よりよきすくさし

長良里

罪もむくひも花よまきつる花
さき枝とさしんクケれ花まき
折下三石のあしをふまき
まらうふ三石比宗をあらわ
芭蕉翁のあしとさし本園

むしあつしつや多度の

山踏せんとる浪れ里ののり

樂書と久より花の孫孫うす

年三三回忌

ちかきもつとつと父よと塚のふ

花曇り晴々くハをれおひなり

向ふきをち盗人れこり

山里の花子孫抱むしつ

嵐山

花々々このも常さぬ嵯峨の宮

ふつと嵯峨我は持て

淋しれとて人をちむのり

贈亡人吳井

よき事といひよきおよ花乃け

眉山の花らん人と君とあはの

文庫とてさく水は傷のく山お

はいらは初まをり山乃や

位をやく人おひれ

まひりく

蝶ももふやまけし花のうけ
池乃端くく一間くをうむの岩
赤し里や花乃名跡を鳴く鳴
そのこは唇をうむくうま

蕉翁の句と自得し

色も香もなぐてま見の眼鼻か
ちとあつとと花と身てと見むと

山寺

撞あもも痛くを花見の泊る

七寺

鈴の音や花見うてくれちせうと
道中といまねてあま二夜三度
捨くく世にうなうう守さう

久らまるとのふ所と

このりきき屋や梅ささい石を
杉橋一本切きなわわくし

杉橋園花見

やうそくハ又来り年れきんくさ
みちくくまよまつね板橋か

梅花園子まろくかりのり

の地は蓮あきつとてちま

月日の素をりんと一人

あつりお念ひく

曙や人乃さうく成本乃向う

品川や海まこくく山ま

月きくくま山さくくく

東叡山

我人見くも目生たき揺う

妙義山

白雲乃名少くは有は板

相原牧

駒れあくやとくくりも山ま

あられ土に残くく土ま

跡くくまやれくくくり重

幸因まくく幸海の神宮に

語

院塔のくさきのさうくさうく
老々才れ意なりうり山さう
おらけくしすもねしき松不

虎足莽

つくくや身て居ぬはちう松
ちうむハ又松まをれさうく
世の中さうねう西上人乃
さうやまうて朝穩う木樹

山堂

わらわい一帖の松ふら

白を合れ舞舞のあうさう
まもくれみ子人形をさう
山やさういあけうう松のえ
久未ぬれ松のい虫さう
心してゆけとさう

山やさうぬれ松のいさう
やうさうハ足ありけさう
得芝う家の側さう西の堂

建つとよらるる

躑躅

本瓜つゝ一廿二のりきき為が
こゝろあつてまひまひる程の雪

遊福壽山

おのつきに藤れむ咲野相が
露雨のくくくはるく庭に水
藤魚れけり一れききき
とくく

春のまぶらるるあつた

早春

雪の松を吹けとも喜かり
けきとありけむ林のなつた
けきや雪れふまゝの沙る山
りあはきは梅のさけもさき
りまもけり何やう 梅乃そ
本居丈人跡生のゆらいせり

園へ帰らるることなき

杉原の杉もまきれもまきれ
あさくくまきまきや杉の門

老慵

更秋人のうきにやちきぬ

屋敷の湯をりさるる山は

梅り人乃孫孫よとて菱の上

内室くくむ久堂とつさくさく

いづ

謹佛 道くくく佛をく佛を路ひるる

牡丹 とくくと牡丹はくくは乃内

芍薬 五六代芍薬つくく山家く

麦秋 関山乃香よ若くき麦秋秋

杜若 子つとくくく植を津田の橋

芥子 神く香れく月ひ狭ぬくれつと

あくく色く又咲あつるけくは

白出く何そと芥子れ若くく抑

けくは矣若れくくも動ききり

けく乃苞くくくくくくく

柱五亭

卯花

若葉

松ヶけやまももさあうとみ子の花

卯のまは枝車とてゆかり垣根うち

これ花もあつて垣の中男くお

逢さうやいつまでまきうとまき

内陸殿

内陸殿とゆへ柳乃ワウ花おが

柿核の壁まきつりりりえくお

鷺湖

あまふして不二もさきき沓坊の湖

築代戸以朝くあめのワウまふが

世義寺子地ふ

夏木立

松風の吹まつても夏木立

伊勢のふりり柳く孔鼻

二つと坊か

玉位やまきふりりなま夏木立

あつてあつてあつてあつてあつて

若柳

若柳の面やあつてあつてあつて

青嵐

葱新くあつてあつてあつて

五ノ花五

五ノ花五

長谷川
五七

初松魚
時の間より日枝ら出たり青嵐
をりるを石川をまきく根原きん

竹の子
竹の子や子付をて寺の門
筍やまきく四五尺も草のあ

眠しきふ竹の子とり子出より

子規

ふけのふたつ 磯より海世な
まのりもまきく印をくやわきくまき
おきまき山ゆき女松けりき

金屏竹梅をまきりをく青雲
海髪深き磯やゆきの石女師

三輪のあはれをまきく

杜宇わらわきくも山乃夏

鶯喜訪たり夜

糸よりさよ子親をく青乃松

木多川より

川、母やあはれをまきく石女
ほきまきす磯や木明乃の池

三輪
五七

野千山より岩を三ツもあきし時
飯田至款を記

十日ありて又七一夕 不ぬ陣
陽空ニシテ此處佛乃〜 海不
岩屋あり大なるお不動さまを彫
つけより此も〜とてく 縁を折を
夕〜ま〜とて〜降き〜い〜
ゆ〜と〜と〜お〜く〜ま〜え〜せ〜こ〜ま〜
不〜く〜ま〜は〜り〜や〜不〜動〜此〜佛〜あり〜つ〜

甲斐の可郡里のゆゆと〜とて 縁を
〜〜〜して予り 説訪れや〜り 縁
〜〜〜縁々とは

表子やおか〜 縁孫れや〜と〜ま〜ま〜
まき〜ん〜〜と 竹竹枕の縁々〜と
一軒の縁を予り 縁々〜と〜と 老乃
幸い又まお娘〜

縁々〜と〜ぬ〜と 夜明〜〜と 縁々〜と
四月十日 大名保下 抄小園中 乃

上巻
下巻

ろきき
一々
書

風哉
一
一
一
一

閑古香

身ゆ
閑古香

閑古香
閑古香
閑古香

閑古香
閑古香
閑古香

庭浦亭

夕月
閑古香

銭子蕉雨

望みはれ夜々もやあつと寝てゆく雨を
雨古しくもあまき淋しさを我を問へ
秋をりや醉人の是も物りさし
ゆんまんと寝をりたり故の夕
連日は雨子りもあつと寝てゆく
情むらもや在のあけ 秋懐のふ
あつと寝をりも故金に萌黄唯まの
こころをよもつとは物さ法外

秋

故懐

短夜

源とてくも身法師名芸門位別
説訪の人俳諧り世ひく平り
松祀園小言とくをわを心か
やれとくもつとてやまもこころ也
つと来ても秋夜も萌黄小月夜哉
こころ夜や冥屋のゆるるまはれあ
短夜乃月もいさよも喜よもか
短夜も月あきよも明もあつ
こころ夜の月あきよも喜よもか

五月

夕雨より打つてくる。五月可郡
雨の如て其甚しき事。五月ふ
中りくは五月を過ぎし古鳥衣

日比栞原乃温泉ありたり

寺の古塔午なりとて硯石あり

菰原をまよくとりて山川あり

おろろと湯入乃人乃もてた

さうとて純し海を舞しんを

葛浦

白比知やあを免うくとて繁き事

幟

幟りや言り松乃川流干

糶

此處やまうとてはま糶

言種しにいくも程糶くは

見くえり乃新小玉ち不競馬の

竹枝くまうとてあまう若此を

竹枝。日も人乃まて極いあお

人り来て植くことし竹の落

心ありやういし竹とてあの人

競馬
竹枝

伊勢方吉と来り孝后と極し

田植

田と栲の人もううぬいさけうハ
うえて古の山田を席れ通うる家
ぬる星の敷を田植れ音一
委むくくくく栲を水田に
五月雨 五月雨乃伊勢二流分き夕

萱草里

うきなきうや先は屋根垢を馬の

粟子の敷

ひりりす川澄れあきよ五月雨

糶藁塚

一一くれもや五月れあ乃中

五月雨や軒より落るあや草

ふりりあき雨の降るあき

五月雨や苔屋を雲に之間う

乙卯五月廿二日於五老峯曾良

居士追福

五月雨や乞食止ても草ま

さくくく南をれ氣のくく

老翁

うひまをくくしよるまはも翁まき
翁はこゝれ吹くまゝまゝくん

吹あ〜〜〜

〜〜〜

百合

ゆりは香の衣とて海を山 崎に
ゆりは香の衣とて海を山 崎に

長中崎

あちきつとねれ、伊賀れ境に

夜盤子

ねんぱんこ ねんぱんこ ねんぱんこ

橘

善竹

あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子

松

善田

螢

あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子

精

歩り精ふふむて居やく兼が

狐川はくくくを過る

竿うんや精のつちあまの氷れ限

却るれまを精舟にゆくと

兼治くくくを精れゆくと

併れもなくとくを精舟とな

金花山の紫く

精れくくくを精くく良の終のひら

あうきけ精舟に残る煙く那

站

新比背子精のちんや 田村川

麻の子

小倉山鹿のまやくくく乃うけ

ちくくくくくくくくく 桶はまふ

照射

夜なくくく照射やまじんねれ鳥

おる角とけくくくくくくくく

信濃の若人亭

照射くくくくくくくくく 漁舟

大城にまを歩りあつさくゆ

あつさなや小倉に精くくく

暑

夕きりやとせあつちとるるのあ

西もれ墨のつらうき

吾國れしとらふ伯母のわ

解といぬへ中やとのまあふ

かたよひは

西乞 西乞や伊ふきしやまの

夕乞 夕乞や墨の指ふき

白るよきし 男はまはひ

夕乞や伊ふきしやまの

團扇
夏月

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

納涼

ささ風の吹けりささるるに
居るもささるるにささるるに
ささるるにささるるに

檀候

ささるるにささるるに
あさるるにささるるに
ささるるにささるるに
梅老の門ささるるに

涼風

ささるるにささるるに
ささるるにささるるに
ささるるにささるるに
ささるるにささるるに

涼水

ささるるにささるるに
ささるるにささるるに
ささるるにささるるに
ささるるにささるるに

夏地

うし馬り一多ゆきるふ地

夏葉

夏葉や一際ありく河系松

夏煙

夏ふく出る松煙、まくと木履の

撰子

荊藤つむくこと夏ありあつ煙

撰子

夏ふくこれ夏とれくす河系松

柳原くすり長くわくか河

河原曲く水多し人語と奪て

すりくく夏ふく相する岩根よ

ま〜

蓮

撰子息吹くけり雨間く柳

夏初つり方のさきよ蓮乃夏

蓮花秀やかふし佛如あ〜んそ

素書に不言や蓮ハ痴人と照るく玉

あ〜けりき音す雨の蓮可南

誰く妻を船こきりき〜蓮の中

一句并二句

蓮の考や人もあ〜りく身苦老庭

能くあ〜りく蓮の志何まりく身苦

茨

瀬戸山子あかきや三時よてか
して帰る路より雷聲平
驟雨乃ちちりちり落き山川の
みずあはれをせせりゆく先の
川く只こゝ縁ありわづら
して矢田川をりて夕陽
らりちり照るして中野
菖蒲こゝり

もつれ花もや胡蝶乃いづら際

藻

昔は元

浮藻ひけハ池一もちれうこまて
映るはもやあつし心を昔のま
昔はぬそやあもち照花さきぬ
月けりもまづうそ来ぬ昔乃花
こちのつ花ば定へるあし言よ
枝子ねふ小冬のをけやそ乃花
古まむしれあきか
るく

其原やあつしはえて昔のま

夕顔

夕顔やまゝに咲けるも老若杖

一白井夕顔身

夕顔やたゞしくも花の友

不化々々日や夕顔月一ニ輪

夕顔や花をまゝは五月のものも

ゆふのはの蒼なくも夕可和

ひふふや梅待水けりもあがり

横須賀常柳もやそ

咲る玉豊とさる梅うら

蝉

夕顔の房子ありても浪ま

軽水口うけは塚なく木うけ

壁うまてるけハあがり蝉の夢

菴乃香芙蓉の花よる色なり

得鏡一字

悔ちうま影を影をさるも

夕顔してそや花高杖うま

色のをとほやふこり小盆

才よきわの草をさるおとほ

秋迫
夕枝

晴
風
園
講

晴
風
園
講

愛 知 県



1103284270

